初の取り組み「むさしの学生小説コンクール」

新型コロナウイルスの影響により、図書館や博物館など、さまざまな文学館は閉館を余儀なくされた。そうした中で、武蔵野文学館は、自由を奪われている学生のために、学生の書いた小説の原稿を募集する「むさしの学生小説コンクール」を開催した。我々新聞文芸部は、企画担当者の武蔵野大学文学部の土屋忍先生に取材した。

この「むさしの学生小説コンクール」は今年が初めての取り組みで、「学校2021」をテーマとして募集している。締め切りは9月末までで、複数作品の応募も可能となっている。最終選考を通過した原稿は、書籍化して世に出することができる。

まず始めに、企画を担当してみて大変だと感じたこと、よかったと感じたことを尋ねると「ご寄付のお話があり、使い途を考えたことが出発点になっています。ゼロからの出発だったので、関係するすべての人に趣旨を理解してもらう必要がありました。誰にも反対されなかったが、仕事をしながらなので時間がかかりました。よかったのは、企画に賛同するチームができたこと、たくさんの方から取材を受けることができたことです」と話された。

次に最終選考を通過した原稿はいつごろ刊行されるのか尋ねると「9月に応募を締め切り原稿の選考を行い、来年には新潮社から短編集として刊行する予定です」と話された。また、落選者の作品は公開されるのかを尋ねると「応募者の意向にもよるが、作品公開の可能性はあります」と話された。さらに「学校2021」がテーマとなった経緯、またテーマに込められた想いについて尋ねると「現在、小学生も中学生も高校生も大学生専門学生も、みな『学校』に振り回されている面があり、それは『コロナウイルス』のせいでもあるが、それだけではないと考えています。多くの先生たちは、児童、生徒、学生たちの学びをとめないよう一生懸命努めてきたと思うし、コロナ禍だからこそできたこともたくさんあると思います。だが、結果として日本の大人たちは(私を含め)必要以上に若い人たちを振り回してしまったと感じています。だとするなら、実際に通学している人たちとっての学校も見え方が変わりつつあるのではないか。これまで当たり前だと感じてきた『学校』という制度が今後も続くとは思えなくなっていることもあるのではないか。新たな学校像に向けての感受性が蠢(うごめ)いていることがあるのではないか、と想像された。そうした感受性に言葉を与えて表現しようとしている人たちの思いを受けとめてカタチにするための器を用意したいと思い、このコンクールを企画しました」。

最後に、現在、応募に向けて取り組んでいる人や、応募を検討している人に向けて、応援のコメントをお願いすると「小説を書きたいと考えている人たちには、ぜひチャレンジしてほしい。私たちは、皆さんの才能と出会いたい、という強い思いを共有しています。選考には幅広い世代の作家、編集者、研究者らが連携してのぞみます。想像力にリミッターをかけないでください。文学に自粛はありません。どうか忖度しないでください。皆さんのご応募を心からお待ちしております」と話された。なお、詳細は公式サイトで。(吉野夏貴)

「めに」

文責 徳永 幸希

流し込み、営業妨害をする人もいる。こうした被害は増えつつある。

■誹謗中傷の対策

SNSでの誹謗中傷が社会問題になっている以上、政府も対策をせざるを得ない。実際に政府は、匿名の投稿者を迅速に特定できるように開示情報に氏名や住所だけでなく、電話番号も追加した。誹謗中傷をした人が簡単に特定できることはいいことである一方、表現の自由が侵害されてしまいい。しかし、このようにしてしまうと、従来のSNSの良さ、今の人々が惹かれるSNSの魅力が完全になくなってしまう。

■今のSNSと共に生きる

私たちは今のSNSとうまく付き合っていかなければならない。現在はコロナ禍ということもあり、とても生き辛い世の中である。そんな世の中を生きる私たちの中にはいつの間にか焦りが生まれていたのかもしれない。その焦りがSNS

見 30 川越市 喜多院

今回は埼玉県川越市の、初詣や春の花見、紅葉の名所として賑わう「喜多院」の魅力を再発見する。

喜多院は、多くの建物が重要文化財に指定されていて、寺宝においても多くの貴重な芸術工芸品も有している。

徳川家光の誕生の間である「客殿」や春日局化粧の間がある「書院」などの重要文化財があるが、中でも「日本三大羅漢」のひとつである「五百羅漢」が有名

この他に寺院の参拝以外でも春の花見や秋の紅葉で多くの人が毎年訪れている。今年はコロナウイルスの影響で人は減ってしまっていたが、例年では3月のお彼岸ごろにしだれ桜、3月の下旬から4月上旬にそめいよしのが見頃だ。そして「春まつり」として屋台なども多くでて

新聞文芸部 公式ツイッター
@kawatonnp で情報発信中!